ブルゴーニュ大学、ボルドー大学における調査報告
および国際交流にむけての提言

溝　口　紀　子
石　川　清　子
岡　田　建　志
永　井　敦　子
立　入　正　之

ブルゴーニュ大学、ボルドー大学における調査報告および国際交流にむけての提言

Report on the visit to the University of Burgundy and the University of Bordeaux with some suggestions for forming new interuniversity relationships at Shizuoka University of Art and Culture

溝口　紀子
文化政策学部国際文化学科
Noriko MIZOGUCHI
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management.

石川　清子
文化政策学部国際文化学科
Kiyoko ISHIKAWA
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management.

岡田　建志
文化政策学部国際文化学科
Takeshi OKADA
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management.

永井　敦子
文化政策学部国際文化学科
Atsuko NAGAI
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management.

立入　正之
文化政策学部芸術文化学科
Masayuki TACHIIRI
Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management.

＜要旨＞
本稿では、2010年夏に行ったブルゴーニュ大学およびボルドー大学の調査訪問をもとに、大学の概要や周辺環境、将来的に可能な学術交流と留学プログラムをまとめた。本学がフランスの大学と交流関係をもつことは研究・教育双方の面で必要であり大きなメリットがある。フランス語語学研修の実現および長期留学を視野に入れて、当該大学との提携が推進されるべきである。海外との大学間協力とそれを促進する体制づくりは、真に魅力ある「開かれた大学」づくりの一環として、本学が今後検討していくべき課題であろう。

＜abstract＞
This report, based on a research trip to the University of Burgundy（Université de Bourgogne）and the University of Bordeaux(Université de Bordeaux) in the summer of 2010, summed up the outlines and surrounding environments of the universities, and academic exchanges and overseas study programs available in the future. Establishing a relationship between universities in France and SUAC is necessary and will be a great advantage for both study and education. Collaboration with the above-mentioned universities should be promoted with a view to enable a French language program and a long-term overseas study program. Collaboration with overseas universities and constructing an organization to promote it are the challenges SUAC should address in the future as part of developing truly fascinating "Open University".

Ⅰ．はじめに

本稿では平成22年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究「本学におけるフランス関連研究の充実と日仏学術交流の実現」の成果の一部として、ブルゴーニュ大学、ボルドー大学における調査報告をする。

2010年8月26日、石川、永井はディジョン市にあるブルゴーニュ大学を訪問した。短期語学研修先の候補として、さらに学期中の長期留学も視野に入れて、大学付属のフランス語教育機関CIEF（Centre International d' Etudes Françaises）を視察した。また、2010年8月29日から9月2日まで、石川、岡田、溝口以上3名がボルドー第二大学、第三大学および大学付属のフランス語教育機関DEFLE（Département de Français Langue Etrangère）との国際交流、学術交流を目的とした視察を行った。ブルゴーニュ大学について石川より、ボルドー大学については岡田より報告をする。

Ⅱ．ブルゴーニュ大学視察報告

1．訪問までの経緯

本学では外国語の夏期研修として英語と中国語はグループでまとまり決まった派遣先に行くが、フランス語については、開学以来外部に委託して個人的に研修先を選んで出かけるというかたちを取っていた。しかしながら、飛行機に乗る時点からまったく一人で行動せねばならず、自分一人で外国へ行って力をつける良い体験にはなるのだが、大学がサポートしてくれて初めて海外へ行こうという学生にとっては利用価値に欠けるとも考えてはいた。

フランスとの大学提携という漠然とした考えのもと、本校の夏期休暇中に研修が可能な付属施設がある大学をインターネットで調べるうち、ブルゴーニュ大学があがってきた。8月初めから9月末までのあいだに研修できる大学付属機関は予想以上に少なく、しかも授業料が高かったり、宿泊施設は紹介するが確約はできなかったり、というところが多かった。加えて、一般に大学事務関連からのメールの返事は素っ気なく、返事が返ってこない場合も多い。そ

のなかで、CIEFは返信の丁寧さが群を抜いていた。

さらにCIEFに興味をもたせたのは、これまで仲介をしてくれた会社が4月に業務を停止したことである。本年度からは本学主催で派遣先を見つけなければならない。ちょうど時期を同じくして進行中だったボルドー大学訪問と同時にブルゴーニュ大学訪問ができるだろうと考えて、CIEFと連絡を開始した。

2．ディジョンとブルゴーニュ地方

大学のあるディジョン市はパリ南東約300kmに位置する人口16万（仏国内18番目人口）の国内では中規模の都市だが、ブルゴーニュ地域圏首府、コート＝ドール県県庁所在地として、仏中央東部の行政・経済・文化の中心都市となっている。中世後期に繁栄を極めたブルゴーニュ公国の首都ディジョンは現在も当時の栄華をとどめ、道路の道幅は狭く古い木組みの家がそこに残り、町を歩けば教会などの古い建築物にやたら遭遇する。歴史的建造物が密集し、町全体が中世美術館と言ってもよい。19世紀に鉄道が敷かれてからは工業が発展し、なかでも食品加工、特にマスタードは有名である。

密集した中世都市の骨格をそのまま留めているゆえだろうか、市中心部は面積として狭く、主要施設には大体歩いて行ける。国鉄の駅から5分程歩くとダルシー広場の凱旋門ギヨーム門で、そこから延びるメインストリートのリベルテ通りをさらに15分歩けばリベラシオン広場に着き、この広場に面して市の象徴的建造物ブルゴーニュ大公宮殿がある。半円形の典型的な王宮広場には、景観の演出としていくつも噴水が埋め込まれ、その水量の変化に応じて広場全体の趣が変わる。夜はライトアップされ、光と水の豪華な空間になる。都市の歴史的・公共的場に軽やかな水の装置をしかける方法は現在のフランスの都市空間演出として流行なのだろうか。もう一つ、フランスの都市がこぞって取り入れるものにトラムがあり、ディジョンもその例に漏れず、市内は至る所トラム設敷の道路工事の最中であった。順調に進めば2012年開通予定である。

ブルゴーニュと言えばワインで有名だが、市内から車で十分も南下すれば名だたる銘酒を産出するブドウ畑が一面に広がるワイン街道になっている。また、「黄金の丘陵」を意味するコート＝ドール県の、豊かな農産物を育むなだらかな丘陵地帯もブルゴーニュならではの美しい風景である。美味しいワインと豊かな食材ゆえ、ディジョンは美食の町の代名詞になっている。フランスのワインはもともと中世修道院での醸造に由来している。ブルゴーニュは修道院、教会の多い土地であり、シトー派フォントネー修道院、サンティアゴ･デ･コンポステーラ巡礼出発点のヴェズレーといった世界遺産を抱えている。

日本からディジョンへの行き方は、まずパリ、シャルル・ド・ゴール空港まで行く（直行便で成田、関西から12時間）。それからパリ市内のリヨン駅に移動してフランスの新幹線TGVに乗り、一時間半でディジョン駅に到着。また、ド・ゴール空港からディジョン駅まで直行のTGVが一日2便あるので（復路も同様）、空港からパリ市内への移動なしにダイレクトにディジョンへ入ることが可能である。

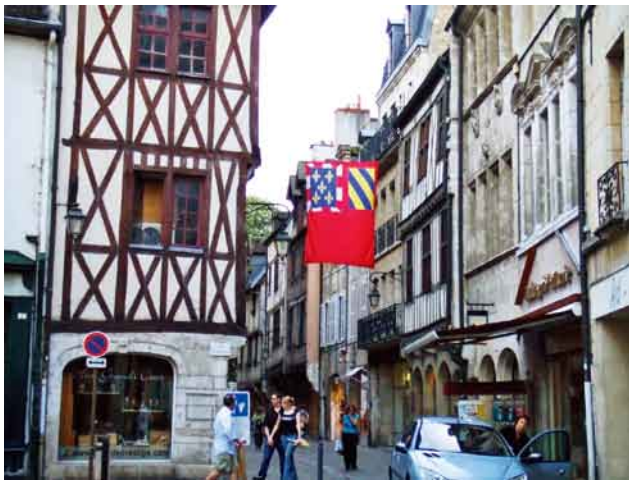

写真１．ディジョンの典型的な木組の家の街並

写真2．市中心リベラシオン広場

3．ブルゴーニュ大学

フランス国内には81の公立大学がある。これとは別に若干の私立大学機関や、いわゆるエリート養成機関である大小合わせて200校余のグランド・ゼコールがある。フランスの大学はほぼすべて国立大学と考えてよい。大学入学資格試験バカロレア（baccalauréat）に合格して、希望の大学学部に登録する。学士（licence）は3年、修士（master）2年、博士（doctorat）3年というコースが一般的である。

ブルゴーニュ大学はブルゴーニュ地域の学区に置かれた高等教育機関である。1722年の法学部創立に始まり現在では6つのキャンパスをもち、学生数27,000人（うち留学生3,000人）、教員4,000人（うち専任1,500人）を数える国内中堅の総合大学である。学部に相当するものは以下10の学系。法学・政治学、言語・コミュニケーション学、文学・哲学、スポーツ科学、理工学、経営・経済学、人文科学、医学、薬学・生物学、生命学・環境学。

ディジョンのメインキャンパスは市中心部からバスで15分あまり。徒歩でも30分強で広大なキャンパスに着く。トラムが開通すれば国鉄駅、市中心部からキャンパスに直結する予定。構内マップを見るとバス停がいくつもある。フランスは1960年代の大学大衆化に伴う学生数増

加によって、これまで市内にあった大学が軒並み郊外に移転し、施設の規模拡張を行った。ブルゴーニュ大学もそういった大学の一つであるが、構内は緑化が意識され木々が多く、こざっぱりした印象を受ける。芝生内にもパブリックアートが設置され、ありがちな殺風景な大学キャンパスにアクセントを添えている。

大学公式webサイト（http://www.u-bourgogne.fr/ ）を見ると、海外62ヶ国、387大学と提携を結んでいる。日本は佐賀大、熊本大など5校と協定を結んでいるようだ。提携校のうち280校はヨーロッパ内で、これはEU加盟国間での学生流動を高めることを目的としたエラスムス・プログラム（The European Region Action Scheme for the Mobility of University Students：ERASMUS）が功を奏したための数であろう。今回訪問したCIEFでも、学期中にこのプログラムを利用してフランス語を学ぶヨーロッパ圏の大学生が多いため、夏学期は非ヨーロッパ圏の学生が多いと聞いた。

写真3．CIEF事務局が入る大学本部

写真4．人文系講義棟

4．ブルゴーニュ大学CIEF

学生派遣を予定する仏語研修機関 CIEFの事務局は、キャンパスのメインストリートとも呼ぶべき通りにある大学本部（Maison de l'Université）２階にある。人文系の大きな図書館に隣接し、また通りをはさんで人文系の講義棟が並んでいる。私たちはまず、CIEF事務局で、サラフ・ゼマリ（Salah Zemmali）センター長に会い、事務局スタッフ全員を紹介してもらい事務局内にある専用図書館などを見せてもらった。教室はキャンパス内道路向かいの人文系講義棟にある。大学付属研修機関サイズとしてCIEFはそれほど大きくない。学内でも重視されている創立100年以上の老舗機関で、年間1,500名の受講者を数えるが、例えば、今回同時に訪問したボルドー大学DEFLE（Département d'Etudes de Français Langue Etrangère）と較べると小規模でスタッフ数も少ない。ゼマリ教授はCIEFのアットホームな雰囲気ときめ細かい対応を強調していたが、それはメール問い合わせの丁寧な返信から既に感じられたし、実際手作り感のあるセンターという印象をもった。少人数のスタッフ間で連絡が密に取れること、事務局のある大学本部近くに教室も配置されていることも強調していた。大学付属の語学研修機関には教室が離れ離ればらばらに散らばっていたり、大学キャンパス外で授業が行われていたりするところもあるが、ブルゴーニュ大生と同じキャンパス内で学べることは、図書館や学生食堂を利用する以外にも、クラブ活動等に参加できるなど、大学生活を普通に経験できる利点がある。

当日はセッション最終日であり、授業はもう終わっていたが夕刻から修了生の成果を披露する催しの準備をしていた。室内のテーブルや椅子の散らばりようから熱心に議論したり、寸劇を練習したりしたあとが窺えた。室内にはエクスカーションのビラや写真などがあり、課外アクティヴィティも十分にケアされているようだった。訪問時に用意してくれた資料のなかには夏期講座として7月分のプログラムを週ごとに案内した冊子がある。大体の流れとして月曜から金曜まで週5日、フランス語の授業が一日平均４時間、午後3時から90分で週４日、歴史や美術などのフランスの文化関連講義が入る。夏期講座は中国や韓国などアジアからの学生が多く、前述したように、学期中に外国の大学で履修できるEUのエラスムス・プログラムのため、EU圏の学生は少なくなる。翌週からは獨協大学グループが来る予定で、東海大学は毎春休みに研修に来るとのことだった。

夏期講座も含め、2010年度CIEFの講座の期間、内容、費用などをまとめてみる。

1）期間：１学期は15週を基本に夏・冬・春学期がある。
　夏：2010年6月7日～9月24日
　冬：10月4日～2011年1月28日
　春：2月7日～6月3日
　夏期についてはこの間で予め設定された2、3、4、6、8週間のみの受講も可。冬期・春期については4週間のみの受講も可。よって、本学の夏期休暇中の4週間の派遣を考えると、2010年は8月30日から9月24日までのセッションが可能であった。また、半期あるいは通年の長期留学を考えた場合、10月から始まる

冬学期は本学の後期授業期間と重なり、2月から始まる春学期も後期試験期間を調整しさえすれば次年度前期授業期間とうまく重なり、派遣可能である。さらに、夏期講座に参加後、そのまま冬学期に接続できるので、長期で取り組もうとする学生には便利である。来年度も概ね上記スケジュールに沿っている。

2）授業料：1学期は1,270ユーロ（1ユーロ＝110円で約139,700円）。400ユーロを前納し、870ユーロは後払い。夏期4週間は640ユーロ（約70,400円）。

3）クラス編成：ヨーロッパ言語共通参照枠（Cadre Européen Commun de Référence pour les langues）6レベルに従って週20から25時間のフランス語の授業がある。クラスサイズは15人から20人。選択で文化・文明講座がある。コンスタントに成績評価があり最終週には期末試験を行い、修了書、成績書が授与される。

4）ヨーロッパ言語共通参照枠：欧州評議会(Conseil de l'Europe)が決めた欧州での外国語学習する際の共通基準で、以下のように分類される。A1が一番下のレベル。

A1	Découverte	（発見）
A2	Survie	（存続）
B1	Seuil	（敷居）
B2	Indépendant	（独立）
C1	Autonome	（自立）
C2	Maîtrise	（習熟）

この基準はまた、フランス国民教育省フランス語資格試験DELF（Diplôme d'études en langue française）のA1, A2, B1, B2 レベル、さらにハイレベルなDALF（Diplôme approfondi de langue française）のC1, C2レベルに対応し、現在ヨーロッパの語学研修機関ではすべてこの基準に沿ってカリキュラムが組まれている。日本にはフランス語の習熟度をはかる基準として実用フランス語技能検定、いわゆる「仏検」が広く活用されているが、上記の6レベルが仏検では何級に相当するかを推定すると、以下のようになる。（仏検主催の財団法人フランス語教育振興協会webサイト（http://apefdapf.org/france/mark/index.html）から推定）。A1（4級）、A2（3級）、B1（準2級）、B2（2級）、C 1 / C2（準1級、1級）。

本学のフランス語受講学生は大体2年後期に4級か3級、3年前期に3級、さらに準2級に合格する学生もいる。ちなみに5級は超初級で、受験料と時間を考えて本学では受験する学生はあまりいない。もし本学学生がCIEFで研修すると下2レベルでの受講から始まると予想される。なお、この基準枠はオーストラリアなどのEU加盟国以外でも採用され始め、今後世界的な基準になっていくだろう。

5）学部との接続：ボルドー大DEFLEでは学部の授業はB2レベルから受講可能とのことだった。CIEFで同じ質問をしたら、それは科目によって異なるので（例えば数学など）、個人的に相談して学部科目を受講するとのことだった。夏期講座では学部の授業はないが、学期中に研修した場合、学部の授業も聴講・受講できる可能性はある。また長期で研修ができればその可能性はより大きくなる。

6）宿泊施設：キャンパスから徒歩15分のところに留学生用学生寮（Résidence Internationale d'Etudiants）がある。バスの便もある。昨年6月に改修されたばかりで、自信をもってゼマリセンター長はこの宿舎を案内してくれた。ベッド数は300で24時間スタッフ常駐。個室で、冷蔵庫、電話、シャワー・トイレ完備、インターネットもケーブルで通じ、キッチンが各階にある。家族向けのキッチン付部屋もあり、学生だけでなく研究者の滞在にも対応している。1階には芝生の庭に臨んだカフェテリアがあり、夏期は営業していないが、学期中は週日朝夕の2食事付。夏期は大学の学生食堂を利用する。料金は夏期4週間で365ユーロ（約40,150円）、冬・春学期は2,054ユーロ（約225,940円）。ホームステイの選択もあり、1泊2食付きで約25ユーロ（約2,750円）。従って、授業料と宿舎代で、夏期4週間では食事なし1,005ユーロ（640ユーロ＋365ユーロ）で約110,500円、1学期15週間では週日2食付き3,324ユーロ（1,270ユーロ＋2,054ユーロ）で約365,640円。本学学生にとって負担の少ない額である。

写真5．S.ゼマリセンター長（右）と S.デュゴワ先生（左）

写真6．留学生宿舎食堂

＜まとめ＞

CIEF訪問の発端は短期語学研修の派遣先として検討するためだった。CIEFやボルドー大学DEFLEの他に、私立のフランス語学校も何校か視察訪問した。一般に私立の学校はオーラル習得に力点を置き、クラスサイズも12人までときめ細かな対応をしているところが多い。しかし、私立は授業料がかなり高いこと、大学付属機関には大学生活を経験できることに加え、大学の授業も単位として取得できる可能性もあることからCIEFを派遣先としたい。

今回のブルゴーニュ大学訪問から以下の5点を指摘して結びとする。

1）語学研修は、外国語を集中的に学べる絶好の機会であり、これまでの例から成果が期待できる。現地で生の言語に触れ生活することは、スキルアップのみに終わらず文化の理解・発見になる。

2）ブルゴーニュ大学は、ディジョンという都市が動き回りやすいサイズの都市であり、郊外にあるフランスの大学のなかでも市中心部に近くキャンパスも整備されている。リーズナブルな授業料、宿舎の完備、パリへの至便、ブルゴーニュ地方の雰囲気など夏期の語学研修にふさわしい。

3）フランスの文化・芸術に対して、文化政策学部・デザイン学部両学部の学生がひろく関心をもっている。フランス語履修は国際文化学科の学生が多数だが、フランスへの具体的な興味については芸術文化学科、デザイン学部の学生がより大きくもっているように思われる。見聞の機会としても語学研修はよいきっかけになる。

4）CIEFを窓口としてブルゴーニュ大学全体との交流の機会にもなる。語学研修終了後、そのままCIEFの冬学期に接続する長期留学のシステムも検討したい。

5）団体で外国に行く場合、グループでいる安心感に浸り、また仲間や引率者に頼る傾向がある。もし本学からCIEFへの派遣が実現したら、外国に行くということを自覚し、授業内でも課外でも自発性と独立性を養う機会としてほしい。

Ⅲ．ボルドー第二大学・ボルドー第三大学視察報告

1．ボルドーの概要

ボルドーはフランス南西部のジロンド県県庁所在地および同県を含むアキテーヌ地域圏の首府である。ガロンヌ川沿いに位置し、中心市街地はこの川の左岸に広がる。人口は約23.6万人（2006年）を数えるフランス第７の都市であり、ボルドーを含むボルドー都市圏の人口は約71.5万人に上る。この地に学ぶ学生はおよそ７万人で、ヨーロッパ最多と言われる。

パリからはTGVで約３時間、空路で約１時間15分と、移動は容易である。中心市街地および近郊における公共交通機関としてはトラムとバスがあり、日常生活における移動も至便である。

ボルドーの起源は紀元前３世紀に遡り、その後、ブドウ栽培とワイン製造、およびそこから発展した商業によって繁栄した歴史を有する。18～19世紀に行なわれた計画的な都市整備はパリに先んじたものである。市内のサン・タンドレ大聖堂、サン・スーラン教会堂、サン・ミシェル教会堂の３ヶ所が「フランスのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」の一部として1998年に世界遺産に登録され、また、市内の歴史地区も「月の港ボルドー」として2007年に世界遺産に登録された。ボルドーまたは近隣の出身の著名な人物としてモンテーニュ、モンテスキュー、モーリアックなどがいる。

写真７．ボルドー市シンボル大時計

写真８．ガロンヌ川とブルス広場

2．ボルドー大学

2－1.概要

ボルドー大学は1441年創立で、現在はボルドー第一大学から第四大学までの４つの大学に分かれているが、これらの４大学は当地の他の研究・教育機関とともにPRES（Pôle de recherche et d'enseignement supérieur、一種のコンソーシアム）を形成している。主たるキャンパスはボルドーの中心市街地からトラムで35分ほどの近郊にあり、ヨーロッパ最大級の規模を誇る。各大学の研究・教育分野は大略次の通りである。

第一大学：理工・技術系
第二大学：生命・人間科学系
第三大学：人文・芸術系

第四大学：法律・経済系

2010年8～9月の調査においては、これらのうち第二大学と第三大学を訪問し、大学関係者と交渉・意見交換をした（調査者：石川清子、溝口紀子、岡田建志）。

２－２.ボルドー第二大学

１）概要

キャンパスはヴィクトワール広場、カレール、タランス-ペサック、ダックスの4ヶ所に分かれる。人間科学（社会人類学、民族学、心理学、社会学、教育学など）、スポーツ科学･体育、ワイン醸造学、医学、歯学、薬学、生命科学、数学、公衆衛生、温泉学などに関する学部または研究所から成る大学である。醸造学部は世界的に有名であり、醸造･品質管理･ソムリエの技術向上などの分野を扱っている。

学生は18000人、教員は1050人おり、ヨーロッパを中心として21ヶ国の125大学と協定を結んでいる。日本では筑波大学など3大学が協定校である。

２）調査に至るまでの経緯

調査者のうち溝口は同大学スポーツ科学部（STAPS）のミシェル・ブルッス（Michel Brousse）教授と長く親交があり、2009年には同教授が静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター開学10周年記念特別公開セミナーで講演した。その際に今回の調査者を含む本学のフランス関係の教員が同教授と意見交換をし、同教授が本学に大きな関心を寄せた。それ以降、同教授と連絡を取りながら、今回の訪問調査の準備を進めてきた。

３）調査

2010年8月30日のブルッス教授との情報交換を経て、同8月31日に同教授による紹介の下、STAPS学部長であり第二大学国際交流副委員長を務めるマリアノ・シッド（Mariano Cid）教授に面会した。シッド教授からは、第二大学が社会的にアピールする大学作りの一環として積極的に国際交流を推進していきたいと考えているところである旨の発言があり、同大学の新規プロジェクトとして本学と学生交換・学術交流の両面で提携をしたいという強い希望が先方より示された。当方からは、そうした提携を実現する方向で具体的に検討を進めたいと伝えた。

４）調査結果に関する調査者のコメント

提携に向けての積極的な希望が先方から示された点に鑑み、円滑に交渉に入れると期待できる。

同大学（および後に述べるボルドー第三大学）で展開されている学問領域は本学の文化政策・デザイン両学部に関わり、ヨーロッパにおける本学の教育・研究拠点としての利用価値が高いと考えられる。

学生交換については、先方からの留学生の受け入れおよび先方への本学学生派遣が本学の教育・社会貢献の質を高めることに寄与すると考えられる。また、PRES全体として海外の研究者の受け入れについての体制が整備されているので、研究面でも積極的に活用すべきであろう。

写真9．スポーツ科学部学部長　シッド氏と石川教授

写真10．STAPS(スポーツ科学部)研究棟

写真11．（左）ブルッス教授、（右）シッド学部長

写真12．STAPS教育棟

2－3.ボルドー第三大学

1）概要

人文学（美術、歴史、美術史・考古学、文学、哲学）、言語・文明研究（英語圏、地中海・イベリア・イベロアメリカ、ゲルマン・スラブ、オリエント・極東、応用外国語、言語学）、地理学、情報、コミュニケーション、観光学、都市計画、環境、ジャーナリズムなどに関する学部ないし研究所があり、外国語としてのフランス語を教えるDEFLE（Département d'études de français langue étrangère）などの機関も属している。第三大学には15500人の学生と660人の教員がいる。60ヶ国の230大学と協定を結び、日本では立命館大学・新潟大学などと協定を結んでいる。海外の大学への対応の組織は整備されていて、研究者の宿舎確保や諸手続きのためのMobility Centreがある。

写真13．STAPS大講義室

写真15．ボルドー第三大学事務管理棟

写真14．シンポジウム会場

写真16．校舎前にトラムが発着する。

2）調査に至るまでの経緯

第二大学のブルッス教授より第三大学所属のフィリップ･ボドール（Philippe Baudorre ）教授（現代文学研究者、専門は文学とジャーナリズム、モーリアック研究）およびDEFLEを紹介され、先方と連絡を取って訪問調査の手筈を整えた。

3）調査

2010年8月31日・9月1日にボドール教授、DEFLE担当者、ボルドー第三大学国際交流担当者と面会した。

4）ボドール教授との面会

ボドール教授はボルドー第三大学前副学長で、これまで外国の大学との提携を手がけてきた経験もあり、本学のウェブサイトも事前に閲覧しているなど本学との交流に積極的な意向を示した。同教授のこれまでの経験に基づき、大学間の交流は着手できるところから始めて、その成果を見ながら拡大していけば、円滑に進められるのではないかとの意見が表明され、集中講義・共同論文指導・講演・シンポジウム・論文寄稿・短期滞在等の学術交流の提案が先方より出された。

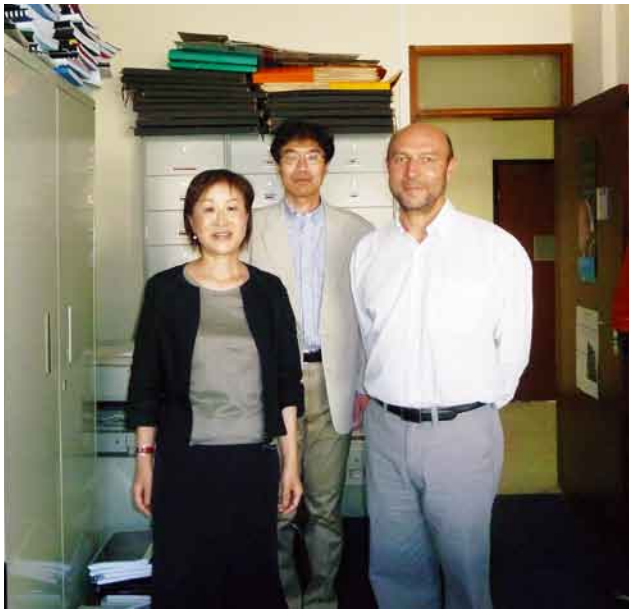

写真17．前副学長、現代文学研究ボドール教授と研究室にて

5）DEFLE担当者との面会

DEFLEではアンリ・ポルチーヌ（Henri Portine）部長をはじめ、計４名の担当者と面会した。ポルチーヌ部長からは、セメスター期間での学生の受け入れについて肯定的な返答を事前の連絡の中で受けていた。

DEFLEには20人の教員がいて、27ヶ国から学生が集まる。日本人学生の比率は5%ほどである。調査時にはカリフォルニア大学のグループの研修が行なわれており、授業を見学することができた。外国の大学から夏期にグループ研修で来た学生は、DEFLEで学ぶフランス語を自大学での単位として習得していくとのことである。入門段階では1クラス20人程度の規模で、レベルが上がるとクラスの規模もこれより大きくなる。授業はヨーロッパ言語共通参照枠の６つのレベルに基づいて編成され、B2レベルで学部の授業についていける程度となる。

本学学生の研修・留学については、夏期研修はDEFLEのプログラムの日程と本学の夏期休業期間が合わないため実施できないが、通常の授業は9月初めから1月初めの学期と1月半ばから5月初めの学期という編成なので本学学期中の学生派遣（留学）が可能であることを確認した。

学費は1学期760ユーロ（約83,600円）である。宿舎として学生寮があり、ホームステイの斡旋も受けられる。留学する学生はDEFLEと連絡を取り合って宿舎やビザの手続きを進めることになる。9月の入学であれば6月には願書を出す必要がある。

写真18．DEFLE校舎。階段教室もあり付属語学学校としては大規模

写真19．DEFLEスタッフ、ポルチーヌ部長（中央）

6）国際交流担当者との面会

ボドール教授とポルチーヌ部長の仲介により、国際交流担当のパトリシア・ビュドー、ヴェロニク・ベガン両氏と面会した。先方からの求めに応じて本学の詳細を説明し、まず学生の交換から検討すべきとの意向が先方より示された。まず先方でボルドー第三大学の日本語科に問い合わせるとのことなので、その回答を待って今後の交渉の方向性を検討することになる。

7）調査結果に関する調査者のコメント

ダイナミックかつ魅力ある都市に位置するヨーロッパ有数の大学であり、ボルドー第二大学と同様にヨーロッパにおける本学の教育・研究拠点としての利用価値が高いと考えられる。また、DEFLEはフランス語研修機関として大規模な部類であり、教育法・設備とも優れていると言える。こうした点に鑑み、

-DEFLEへの学期中の学生派遣（交流留学）

-教員間の学術交流

について提携を結ぶことが本学の教育・研究の質の一層の向上に資すると考えられる。

Ⅳ. まとめ

ブルゴーニュ大学、ボルドー大学提携に向けての課題および提言は以下のとおりである。

1)フランスとの大学提携はフランス語履修学生とフランス関連研究教員のみのメリットに留まらず、広くヨーロッパ研究の拠点にもなる。ボルドー、ディジョンとも都市文化、芸術、歴史、食文化の研究対象の宝庫であり、周辺部の環境も素晴らしい（例：世界遺産多数）。両市ともトラム導入、都市景観整備などまちづくりに熱心。ボルドーは他のヨーロッパ主要都市との空路が非常に便利であり、ディジョンはパリに近いのも魅力であろう。

2)本学でのフランス語は２年次以上が国際文化学科の専門科目ゆえ国際文化学科の学生が主に履修するが、１年次全学共通科目レベルでは全学１年から４年まで多数が履修し、2年次以降も学科、学部の枠を超えて履修を続ける学生が多々いる。フランスへの興味に関しては、特に美術・映画・建築等の芸術の領域で芸術文化学科、デザイン学部の学生が具体的かつ専門的な興味を示す。全学学生が活用できるリーズナブルな費用の夏期語学研修、長期留学のシステムを構築していきたい。

3)学術交流に関しては、要となる教員に他分野の教員を紹介してもらうなどして、両学部の教員が研究・教育の必要に応じて活用できそうである。ボルドー大は海外研究者受入れシステムが完備しており、ブルゴーニュ大は留学生（研究者含む）用宿舎が最新かつ快適。協定があるとサポートの諸手続きがスムースに進むと考えられる。

4)当面、夏期語学研修は引率教員を同行する必要がある。それにより語学研修参加学生は増加する見込みである。

5)DEFLE、CIEFで学期中の長期留学が実現する場合、学部留学でなくても単位認定となるような制度ができないだろうか。本学のカリキュラムによる履修では、留学先の学部での単位しか本学卒業単位にはならず、学生の留学が促進されない。夏期の語学研修、協定校の語学留学の単位認定の方向を検討する必要がある。

6)ボルドー第二大との交換留学を含め、本学の海外大学との交流を発展させるためには、留学生の受入れ、派遣サポートをする国際交流専用の窓口を設置する必要があるだろう。

7)「開かれた大学」として国内外に本学をアピールしていくためには、提携実現は必須である。海外提携校が増えることは、留学を考えている本学受験生にとっても大きなポイントになり、戦略的な意味合いを持ち合わせることになるであろう。